

Title	『うつほ物語』私見：仲忠の主人公性は何か
Sub Title	
Author	高橋, 諒(Takahashi, Ryō)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2018
Jtitle	三田國文 No.63 (2018. 12) ,p.1- 13
JaLC DOI	10.14991/002.20181200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20181200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『うつほ物語』私見

—— 仲忠の主人公性は何か ——

高橋 諒

一、作り物語の主人公——『落窪物語』を端緒に

『うつほ物語』の主人公は仲忠である。このことは、疑問の余地がない、自明の事柄として捉えられるにもかかわらず、実のところその理由は判然としない。唯一主人公が仲忠であることを検討したのが、室伏信助氏「宇津保物語の主人公」である。氏は主題性を担う人物が主人公であるとして、仲忠を比定する。しかし『うつほ物語』が錯綜した成立事情を抱えながら、劈頭から掉尾まで一貫した主題を有するのか、という点で疑問が残る。

また、作り物語における主人公の造型⁽²⁾について、従来以下の三点が指摘されてきた。

【1】 男主人公・女主人公は貴族の子息・子女である。

【2】 超越的性質（変化の者・美質など）を有する。

【3】 （在世の間は）作中世界に登場する。

右は主人公の有する資質として認められる。だが一方で、主人公という定義そのものは詳らかにされていないのが実状である。むしろ、慥かだと断じられ、誰も論じてこなかった感さえ

ある。仮にこの性質を定義に置き換えてみると、『うつほ物語』では仲忠のほかにもこの三点を満たす人物が存する、という問題が生じる。その最たる例としてあて宮が挙げられよう。

俊蔭の漂流に始まる琴の奇瑞譚たる「俊蔭」巻、あて宮求婚譚の劈頭たる「藤原君」巻。この両巻を端緒とする二系統の筋が『うつほ物語』全篇を通して混在するとこれまで考えられてきた。とすれば、あて宮も主人公に該当するはずで、仲忠に限定する蓋然性を見出しがたい。では、はたしてどのようにして認定しうるのだろうか。

この問題にかんして、『落窪物語』はその手がかりを提供してくれる。

君達とも言はず、御方とは、まして言はせたまふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしと、つつみたまひて、「落窪の君と言へ」と宣へば、人々も、さ言ふ。……この君のかたちは、かくかしづきたまふ御むすめなどにも劣るまじけれど、出で交じらふことなくて、あるものと知る人もなし。（巻一／九〜一〇頁）⁽⁴⁾

後妻が先妻の子を冷遇・迫害する。この図式は、継子いじめ譚

の典型であり、読み手が姫君と当初から有する共通認識でもある。姫君を「落窪の君」と称して、家の者たちに呼ばせる継母。そして邸にいる者のほかには存在を知られない姫君。劈頭から語られる姫君の現況は、読み手にしか把握されていない。

「落窪の君」とは、この人の名を言ひけるなりけり、わが言ひつること、いかに恥づかしと思ふらむと、いとほし。

継母こそあらめ、中納言さへ憎く言ひつるかな、いとわいひう思ひたるにこそあめれ、いかでよくて見せてしがな、と心のうちに思はず。

(巻一／七〇頁)

早々に姫君の存在を察知し逢瀬を果たしながらも、「落窪の君」が姫君を指し示す名であることを、少将は知らなかった。すなわち、ここで初めて姫君の不遇を認知したのである。こうして、最初から読み手と姫君の間で共有されていた継母の所業が暴き出され、少将は密かに復讐を画策する⁽⁵⁾。継母の知らぬ間に姫君の境遇を少将が理解するという構図を、姫君と読み手は新たに分かち合う。

他方、『住吉物語』では掉尾に至るまで、継母による悪事が白日の下に晒されるのを俟たねばならない。

大将・姫君・侍従、をのをの始めより終りまでの事ども、かきくどきつつ語り給ひて、疎かならぬ由聞こえければ、その時の有様、昔も今もかかる例ありがたくぞおぼえける。

(二二二頁)

顛末を知る大将・姫君・侍従は、姫君の実父に悪行の実態を詳らかにする。真相が暴かれた継母は、実父・大納言との別居を余儀なくされ、また実の姫君たちにも離反される事態に発展す

る。

わが姫君よりはじめて、伝へ聞く人、心あるも心なきも、疎み果てられて、破れたる家の蓬の園と荒れたるに、むくつけ女と明かし暮らし給ひけるも、さすがにあはれなり。人に物思はせしたる報ひなれば、泣くよりほかの事はなし。

(二二五頁)

すべての企みが世に露見した継母は、計画に加担した三の君の乳母と共に困窮した生活を強いられることとなった。亡き実母の遺言に従い、本来実現されるはずであった入内が、継母の奸計により阻止された過去を姫君は抱えていた。その当時姫君は、

「この事疎き人には聞かせじ。あなたこなたの憂き名なり。人聞き見苦し」とぞ宣ふ。

(八六頁)

と、この事実を秘匿する決意をしていた。ゆえに、姫君へ数々の策謀をめぐらしてきた継母の行為は物語の終わりまで黙認され続けてきたのである。そして、かような謀計による姫君の行動は読み手との間でのみ諒解される事項となっている。例えば、経緯や場所など、姫君の失踪に関する事柄は読み手と姫君しか知り得ない。そのため、大将は住吉明神の靈験に頼ることが、物語上の要請として不可欠だった。

このように見てくると、『落窪物語』『住吉物語』にあつては、読み手と近似した情報量を有する姫君をこそ、作り手は主人公として位置づけているのではないか、という見通しが立つ。かような、読み手と作中人物の関係性に則して、他の物語を見てみると、どうであろうか。

二、「源氏物語」における秘密

継子物に見られる、秘事が露見する／しないという事象は、『源氏物語』では展開に直接関わる仕掛けとして機能しているように、見受けられる。

某院で囂らずも引き起こされた夕顔の変死によって、源氏は窮地に立たされる。そのため、当事者の源氏および限られた関係者たる右近・惟光は、夕顔に関わる一切を漏らすまいとする。

頭中将を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひたつありさま、聞かせまほしけれど、かことに懼ぢてうちいでたまはず。……右近だにおとづれたまはねば、あやしと思ひ嘆きあへり。……惟光をかこちけれど、いとかけ離れ、けしきなく言ひなして、〔夕顔〕巻／①一七七頁）

かくして、頭中将や五条の宿の人々からの不審の眼をかい潜り、夕顔の遺児・玉鬘の存在をも隠し通せたのであった。当初玉鬘の所在は源氏も知るところではなかったが、夕顔の乳母・右近により一報がもたらされる。父・頭中将ではなく、源氏に対して右近が先に報告をしたのは、夕顔の一件における源氏との共犯関係によるところが大きい。ゆえに、頭中将は源氏によりやく教えられるまで、玉鬘が自らの子と認知できなかったのである。ただし、夕顔の死に源氏が関与していた点はいぞ明かされることはない。

また、禁断の恋も漏れ出ることはない。病による里下がりの方折、源氏との逢瀬で不義の子を宿した藤壺は、恐怖におののき

ながらも、周囲に悟られまいと必死に努める。そして、藤壺が崩御した後、冷泉帝は夜居の僧から出自の仔細を初めて聞き及ぶことになる。

「さらに、なにがしと王命婦とよりほかの人、このこのことのけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬは、このけなり。……」〔薄雲〕巻／③一七二頁）

事情を理解した冷泉帝から讓位をほめかされた源氏は、帝が真実を知ったことに思い至り、ただちに王命婦を問いただす。その返答は次のとおりである。

〔王命婦〕「さらに、かけても聞こしめさむことを、いみじきことにおぼしめして、かつは罪うることにやと、上の御ためをなほおぼしめし嘆きたりし」と聞こゆるにも、

〔薄雲〕巻／③一七八頁）

右の夜居の僧と王命婦の言は、藤壺との密通の事実が漏洩していないことを示唆する。また、秋好中宮の立后や准太上天皇の贈位など、冷泉帝は人知れず源氏への孝恩に報いつつも、自身の出生を語り出しはしない。

情事の他には、子が三人生まれること、そのうち、一人は帝、一人は后、一人は太政大臣になるという星占を、源氏は得たことが明かされる。この予言は、源氏と読み手にしか知り得ない。

めづらしきさまにてさへあなるとおぼすに、おろかならず。などで、京に迎へてかかるとをもせざりけりけむと、くちをしようおぼさる。宿曜に、「御子三人、帝、后か

ならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と、勸へ申したりしこと、さしてかなふなめり。〔濡標〕巻／③一七頁

このように、作中世界で機密を守るのは、当該人物とごく一部の作中人物に限られ、周知の事実として暴かれることはない。しかし第二部においては、そうした関係性も一変する。

このことの心知れる人、女房のなかにもあらむかし、知らぬこそねたけれ、烏漣なりと見るらむと、やすからずおぼせど、わが御咎あることはあへなむ、二つ言はむには、女の御ためこそいとほしけれ、などおぼして、色にも出だしたまはず。〔柏木〕巻／⑤三〇〇頁

女三宮の不注意によって柏木の手紙を源氏が発見し、柏木との密通及び女三宮の懐妊が発覚する。源氏はその不義を知りながら、傍線部のようにあえて表向きは言い出さない。男児の出生を果たした後、女三宮は出家し、それを伝え聞いた柏木は悶死する〔柏木〕巻。二人は物語の表舞台から姿を消し、秘事を知りうるのは、源氏をおいてほかに存在しなくなる。

先に読み手は内実を把握していて、後から光源氏が真相に辿りつく。そのような形式は以下にも看取される。明石入道の手紙から大願を抱いていた経緯が判明する〔若菜上〕巻、秋好中宮の出家の意思を把握する〔鈴虫〕巻、落葉宮と夕霧が恋愛関係にあることを認識する〔夕霧〕巻、女三宮を正妻として迎えた際の、紫上の懊悩を理解する〔幻〕巻。すべての情報は光源氏の認知するところにある。

なお、第二部の源氏は真実を後から知るという点で、『落窪

物語』の少将と共通するのではないか。そのような反論が予想される。例えば、柏木の一件は、源氏に藤壺との密事を思い起こさせる。第一部当初から保持し続けた情報が機能している。単に、未知の事柄を物語の中途で得ただけではない。『源氏物語』の場合、あくまで第一部あつてこそその第二部なのである。

三、後期物語における秘密

『源氏物語』のように、読み手と等しく、物語に仕掛けた秘密を付与した存在を作り手は主人公と位置付けているのだろうか。その点を検証するべく、さらに平安後期物語に目を向けてみたい。

秘事を終始抱えた作品として想起されるのは、『今とりかへばや』であろう。関白左大臣家に生まれた二人の子は、一方はひどく内向的な性格の男君、他方は活発で快活な性格の女君であった。その並々ならぬ氣質ゆえに、男君は女装をして、女君は男装をして、成人することとなった。

今年は御裳着・御元服、われもわれもと急ぎ給ふ。その日になりて、このとのしつらひ、世の常ならずみぎきたてて、姫君渡し奉り給ふ。東の上も渡り給へり。大殿ぞ、御腰は結び給ふ。うとうとしからぬはねちたけれど、さすがにかたはらいたくおぼすなるべし。かかる御事どもを聞くよそ人は、思ひ寄るべき事ならねば、ただ若君姫君を思ひたがへ、聞きひがめりたりけるとのみぞ、心得ける。まれまれくはしく知りたる人は、また、いかでうち出づべき事のさまならねば、なべて世に知る人なきぞ、いとよかりけ

る。

(巻一／一六―一七頁)

いきさつを耳にする人々の中には、男君と女君を思い違え、聞き違えていたと解する人もいれば、詳細を聞き及びながら口にするのを憚る人もいた。よつて広く世間に真相が伝わらずに済んだのである。このように、劈頭から物語の秘密が提示されている。

「かかるほどは、なほこの人に従ひて世をも背き隠すばかり」と、「所せく世づかぬありさまを、異人に見扱はれん、あやしかるべかりけり」と思ひなほして、その日ばかりと契り定めて、まづ吉野の宮に参り給ふ。(巻三／一四五頁)宰相が強引に関係を持ったことで、男装の女君は露見を恐れるようになり、度重なる逢瀬の果てに妊娠してしまう。出仕することが難しくなった女君は、宰相の説得に応じて、用意された宇治の隠れ家に行き出産することを決意する。

男装の女君が失踪した一報を受けて、女装の男君はあてのない搜索に赴く。そこで、男装の男君と再会。お互いの役割を再度入れ替え、男君は大将として、女君は尚侍として再出仕する。

このように、「今とりかへばや」では、二人の秘事が表沙汰になることはない。宰相は女君が男装していることは知りながら、男君が女装していることは知らない。それゆえ、二人の立場を交替させ、宰相を欺き通すことができたのである。また、女装の男君は、後から内実を知り、女君を救出する点から、『落窪物語』の少将と同様の役割を担っている。したがって、物語当初から、読み手と情報量を同じくしているのは、男装の

女君である。当該作品も『源氏物語』と同じく、秘密を一貫して有している。

次に、『狭衣物語』『夜の寢覚』『御津の浜松(浜松中納言物語)』と、続けて見ていくことにしよう。

ただ、二葉より露ばかりへだつることなく生ひたちたまひて、親たちをはじめたてまつり、よその人々、帝、春宮も、ひとつ妹背とおぼしめしおきてたるに、我は我と、かかる心の付きそめて、思ひわび、ほのめかしてかひなきものから、

(巻一／一頁)

幼い時分より分け隔てなく接していた源氏宮と狭衣の関係は、はたから見れば異母兄妹の間柄に過ぎない。しかし「我は我」とあるごとく、狭衣の心中は他の誰とも異なるものであった。

「この御かたち有様になずらふばかりのはありがたきわざにこそ」とおぼさるるままに、いとど人知れぬ心のうちに思ひこがれたまふさま、いといとほしう、音無の滝とやつひになりたまはむと見ゆるを、さすがによう忍び紛らはしたまふほどに、

(巻一／一九頁)

禁忌の恋は、誰にも悟られぬよう狭衣の中に秘められ、表に出ることはない。春宮に源氏宮への思慕を察知され、問い詰められた折には、表面上春宮の嫌疑をうまく躲し、追及から逃れるものの、言外に滲み出る恋情は隠しきれない。その後、源氏宮が春宮妃に望まれていることを知った狭衣は、焦燥感に駆られ源氏宮に自らの恋慕を打ち明けるが、拒絶されてしまう。

「誰もかかる御心をも知らぬよ。かやうに常にあらば恥づかしうもあるべきかな」とおぼすに、

(巻一・四七頁)

宮は、「いとほしたなし」とおぼせど、母宮の見たまへば、例のやうにもえ背きたまはず、御顔はいと赤くなりて、甚も打ちさして、

(巻一／七二頁)

源氏宮の心中では、誰も狭衣の激情を知らぬこと、そして容易に周囲に告白することもできずに、いつものように振る舞わねばならない。そのような苦慮が見てとれる。

源氏宮に拒まれた狭衣は、源氏宮の面影を求め、女二宮と強引に契る。結果女二宮は妊娠し、母・大宮によりその事實は隠し通されるもの、大宮が心労により亡くなってしまふ。

大将、かかることを聞きたまふに、口惜しく悲しとも世の常なり。……あながちなる心のすさみに、あまたの人をいたづらになしきこえつるは、人にこそたまはね、ひとかたならず、いかでかは世の常におぼされむ。

(巻二／一九二頁)

大宮の死去に伴い、女二宮が出家した由を狭衣は耳にする。そして、源氏宮への思慕が女二宮の出家のほか、多くの人々の破局を招いたことに対して、自責の念に駆られていく。そうした心中は周囲に明かされぬまま、結末部で出家した女二宮と対座するまで、自らの過失を悔やむこととなる。

「かく〔出家〕しなしたてまつりけむよ」とおぼしつづくるにぞ、忍びかへさせたまひつる涙、漏り出でさせたまひぬる。

(巻四／三七二頁)

このように、『狭衣物語』では、狭衣の秘めたる慕情や心中思惟は、作中人物には漏れ出すことはなく、物語の終わりまで保持され続けるのである。

中間及び末尾欠巻部分を有する『夜の寝覚』の劈頭で、八月十五夜、床についた中君は不思議な夢を見ることになる。

あやしさに、琵琶を取り寄せて弾きたまふに、大臣聞きたまひて、「こは、いかにかく弾きすぐれたまひしぞ。めぐらかなるわざかな」と、あさみおどろきたまひつれど、夢をば、恥づかしうて、なかなか語りつづけず。

(巻一／一八頁)

中君は、天人に教示された琵琶の秘曲を試奏する。それはまさに父の大臣を驚嘆させるほどのものであった。しかしなぜ弾けるのか、夢の出来事であるため、父にも言い出せずにいる。

この手どもを、覚めて、さらのとどこほらず弾かる。あさましよう、思ひあまりて、姉君に、「夢に琵琶を教ふる人こそあれ」とばかりきこえたまへど、なかなか語りつづけたまはず。

(巻一／二〇頁)

翌年の八月十五夜、再び夢裡に天人は現われ、教え残した秘曲をすべて伝える。目覚めた中君は、それを完璧に弾きこなし、不気味さゆえに思わず、天人に夢の中で教わったことを打ち明けるものの、それ以上何も言えない。実のところ、中君が父や姉に口を閉ざす理由は、天人から授けられた演奏法よりも、むしろ授けられた二つの予言にこそあった。

「……おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、國王まで伝へてまつりたまふばかり」

(巻一／一七―一八頁)

「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したま

ふべき宿世のおはするかな」(巻一／二〇頁)

一つめは、琵琶の奏法が天皇にまで伝わること。二つめは、中君が心を乱す宿縁を持つこと。この二点が隠匿した内容であり、これは冒頭において、中君と中納言が契りを結んだ一件と連動している。

この人〔中君〕にも中将と思はせて〔中将は〕のたまふに、……〔中君〕「この際はさ〔但馬守女と〕思はせて。またおのづから、かばかりの御契りはつひにのがれたまはざらむをば、いかがはせむ」と、涙落ちぬれど、さりげなくもて隠して、(巻一／三四頁)

中君は中納言を宮の中将、中納言は中君を但馬守女であると、互いに誤認する。この情交により、中君は妊娠し、石山姫が生まれる。他方、のちに誤解が判明し、中納言との関係に懊惱していくこととなる。前者は秘曲伝承者たる石山姫が将来后位につく暗示、後者は中君の回想から、構想が掉尾まで存続している点を確認できる。

〔石山姫〕ただうち見るより際もなき人の生ひ先、その道ならぬ大和相をおほせて、上なき位をきはめたまはむこと、なにの疑ひあべうもあらぬ人のものしたまひける。(巻五／四七二頁)

〔中君〕「さるは、面馴れて、さすがに度ごとくに、いみじう心の乱るこそは、かの十五夜の夢に、天つ乙女の教へしさまの、かなふなりけれ」とおほし出づるぞ、前の世まで恨めしき御契りなるや。(巻四／三九〇頁)

依然として物語全篇を貫く天人の言。それは、中君のほかは

知るべくもないところにある。

『御津の浜松』は首巻こそ欠くが、中納言の行動とともに作中世界が展開していくため、中納言が中心的人物に疑いない。しかし物語の上ではそれだけに留まらない。

「……中将の乳母、おぼつかなきに待ちもあへず、さま悪しう来向かふやうに人には思はせて、夜を昼になしてくださせ給へ。京に入りはべらぬさきに、かれにあづくべきものはべるなり。あなかしこあなかしこ、人に知らせさせ給ふな」とて、(巻第二／二七頁)

唐后と出逢うという夢告を得ながら「山陰の女」がそれであるとは知らずに、中納言は契りを交わす。のち、身籠った唐后は若君を出生し、中納言はそれらの事実を知ることになった。夢に従い唐后は、若君を帰途につく中納言に同行させる。帰朝直後、若君を親しい女房に秘密裡に預け、口固めをする。唐后との関係が露見することを恐れたことは以下の記述から窺い知れる。

よろづを隔てなく聞こえ知らする大將殿の君にだに、一事を深く残し置きて聞こえ出でねど、もろこしの御文にもかすめ書き給ふめりし若君をも心得て、この人は、見給はむこそよからめ。これにさへ残すべき心地のせねば、もろこしに思ひ立ちしほどの道のほのありさま、かしこに行き着きてのことども語り出で給ひて、(巻第四／三三四～三三五頁)

身近な者にさえ唐后との一件をひた隠しにする中納言。しかしその態度は姫君にはすべて見抜かれていた。姫君のみ打ち明け

られると思つたために、渡唐での巡り合わせを具さに語り出す。おそらく姫君の子として唐后が転生してくることが後に明らかとなるため、物語の要請上、事実を詳らかにしたのである。その後、唐后が身罷り、父が転生した第三の親王が東宮に立坊された由が、来朝した唐人からもたらされる。物語の末尾にあつて、自らの夢の意味に中納言は思い至るのだった。

このように、唐后と中納言の關係こそが『御津の浜松』全篇で抱える機密であつた、と自然と諒解されてくる。

以上、後期物語を辿り見てきた。作中世界では主人公だけが秘事を有し、それを知っているのは読み手に限られる。つまり、作り手は、物語に仕掛けられた秘密を、主人公と読み手にのみ同程度付与する、と言える。

四、仲忠の主人公性

では、『うつほ物語』における秘密とは何であろうか。それは、琴の秘曲を一族以外に伝えないことである。物語の劈頭から仲忠は人前で披露することを常に拒んできた。

①上、聞こし召して、御前に召し出でて、「常よりも、物の音まさるべき晝になむある。かの三代の手、今宵仕うまつれ」と仰せられければ、「仲忠」かしこまりて、仕うまつらねば、
〔俊蔭〕卷／五五頁

②侍従（「仲忠」）、「年ごろむげに忘れ果て侍りしに、切なりし宣旨の恐ろしさに、からうして思ひ給へ出でて、一手仕うまつりしを、そもそも、『はかばかしうや侍りけむ』とだにおぼえ侍らず、今は、まして、かけてもおぼえ侍ら

ず。……」

〔俊蔭〕卷／五九〜六〇頁

③仲忠、例の曲の手をば弾かで、思ひの物を弾く時に、「かくては、御祿もいかがはせむ。なほ、少し細かに遊ばせ」と、切にのたまへば、調べ変へて弾く。面白きこと限りなし。いまだ、仲忠、かやうに弾く時なし。

〔俊蔭〕卷／六〇頁

①では帝に弾くよう命じられながらも、琴を手に取ろうとはしない。②では記憶が曖昧なことを理由に拒否しようとする。③では奏法をいつもと変えて、なおかつ普段より水準を落として弾く。琴の腕前を隠すかのような態度は、後の諸巻にも明確に表れている。

④〔正頼〕「……かの碁手物は、今宵、神事にもあるを、今一度、かの物の声聞かせ給へらば、ただ今も奉りてむかし」と欺き給ひて、御琴取う出て、切に弾かせ給へども、
〔仲忠〕さらに手も触れず。〔嵯峨の院〕卷／一八二頁
⑤あるじの君（「涼」）、「この御琴は、まづ試みさせ給ひてこそよからめ」。仲忠、「さること仕うまつらで、久しうなりぬれば、掻き鳴らさむことなむ思ほえず侍る」など、つれなく言ふ。
〔吹上上〕卷／二五二頁

⑥涼、「苦し」と思ひて、はさきの□□が族の胡笳の一の拍を、ほのかに掻き鳴らす。仲忠、からうして、同じ拍の同□□を、はつかに掻き合はせて、
〔吹上下〕卷／二九〇頁

⑦仲忠、「今は限り、この琴、まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは、天地驚くばかり仕う

まつらむ」と思ひぬ。…仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。
〔吹上下〕卷／二九二頁

⑧仲忠、左近の幄に、笛吹きせめて、勝ちたる遊びしをるに、召す声を聞きて、笛うち捨てて、逃げ隠れぬ。

〔内侍のかみ〕卷／四〇四頁

④では正頼に騙られるが、琴にすら手を触れない。⑤で琴の試奏を促されながらも、演奏の仕方を覚えていないとすげなく返答する。⑥ではほんの少しだけ弾き合わせる。⑧では吹いていた笛を捨て逃れるほどに、朱雀院の所望に応じようとしなない。唯一⑦だけは、仲忠が避けられなかったりである。今回はかりは制御の難しい琴を沈静化させるために、天人から習った秘曲を余すところなく演奏する。ただし、「大曲」とあるように、楽曲のすべてを曝け出しはしていない。

なお、俊蔭女も仲忠と同じ態度を見ている。仲忠の代わりに俊蔭女を召喚し、朱雀院の召しに応えさせる。逡巡しながらも弾くことにした俊蔭女。兼雅を迎え取られた後は、琴に触れることも一切しなかった。それゆえ、昔を思い出すにつれて、徐々に感興をもよおす弾き方に変貌していく。

⑨殊にかから〔南風・波斯風〕に劣らず、いと切にあはれなること添へる御琴にて、北の方、心にも入れず掻き鳴らし給へど、……この大将のおとどにも、さらに、この琴弾きで見せ奉り給はず。……よろづにあはれなりし古事を湧くごとおぼえて、世間もののあはれに悲しくおぼゆれば、やうやう心ある手ども弾きかかりて、

〔内侍のかみ〕卷／四二六〜四二七頁

一見仲忠とは異なつて、俊蔭女はその奏法を明らかにしているかのようである。だが用いたのは、波線部のごとく天人から引き継いだ南風・波斯風に類似した琴であつて、実物ではない。このことは次の天人の命令、俊蔭の遺言に基づく。

天人の言はく、「……この二つの琴〔南風・波斯風〕をば、かの山の人の前にてばかりに調べて、また人に聞かすな」とのたまふ。
〔俊蔭〕卷／十四頁

〔俊蔭〕「その琴〔南風・波斯風〕、『わが子』と思さば、ゆめ、たふたふに、人に見せ給ふな。ただその琴をば、心にも、なき物に思ひなして、長き世の宝なり、……」

〔俊蔭〕卷／二二〜二三頁

俊蔭女は南風・波斯風で弹琴することはせず、仲忠は演奏することさえほとんどしていない。すなわち、両者は天人から譲り受けた琴、伝承した秘曲を公にしないという点で一致する。元を辿れば、俊蔭も帰朝した後に当時の帝から春宮に秘琴の曲を伝授する由の要請を固辞していた。伝承者の系譜たる俊蔭女・仲忠は、天人の秘伝を一族の中で保持しているのであつた。「蔵開上」巻劈頭で俊蔭の遺文集が発見された折、仲忠はそのことを帝に報告していた。そして、帝から命令されそれらの講読に依じてもいた。その点を踏まえると、天人に伝わった秘事のみを隠そうとしたことがわかる。

また、俊蔭が仲忠・俊蔭女に夢告するくだりが存する。

大将もうち臥し給ひ、尚侍の殿も、琴に手をうち懸けて、いささか寝入り給ふともなきほどに見給ふやう、「昔の物の声の、さも、あはれにめづらしく聞き侍りつるかな。大

将も、御楽の声も、あはれに愛しうなむ。さて、今日、門に参らむ人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と、治部卿の御声なり。
〔楼の上下〕卷／九〇七頁

南風・波斯風を弹奏し、俊蔭の詩集を朗誦した夜、二人が夢で見たのは俊蔭だった。京極邸に訪れる者がいることを伝える。俊蔭女が仲忠を出産する折、世話をしてくれた、さかの孫たちがその予告通り、京極邸の門前に現われる。秘伝としていた二つの琴を掻き鳴らして、一族の祖俊蔭が現われた点は、一族にとつての秘密が琴である証左となるだろう。

対して、仲忠以外の主要な作中人物には、読者とだけ情報を共有している箇所があるのか、確認する。特に、第一節で述べた主人公の資質を有する、兼雅、正頼、あて宮を中心に見ていきたい。

まず、兼雅の場合、読み手との間においてのみ共有されるべき事項はない。元服前に俊蔭女と契りを交わした後、北山で自らの子・仲忠と巡り会うまで、兼雅は俊蔭女とはお互いに名前も出自も知り得なかった。また、その一夜の契りは二人の間でしか認知されない出来事であった。だが俊蔭女・仲忠を三条堀川の邸宅に引き取つてからは、世に知られるところとなった。すでに秘事は露見した状態にある。

かくて後なむ、「さは、この三条の北の方は、俊蔭の娘」と、人知りける。「年ごろは、いかなりける人ならむ、いみじき色好みも、かく傍目せさせ奉らぬこと」と、あやしがり聞こゆるもあり。また、「卑しき者を取り据ゑて、言ふ効なく纏はされ給ふぞ。色好みの果ては、かくぞある

や。あやしき者にとまるとは」などぞ、安からず聞こえける。
〔俊蔭〕卷／五五頁

次に、正頼の場合、自身の九女・あて宮の婿に誰をとるべきか、容易に決しがたい態度をとる。次に挙げるように、あて宮に仲忠がふさわしいという発言があり、

北の方〔俊蔭女〕「……春宮ののたまはするにも出だし立てられぬ娘、取らせむ」とのたまふぞありがたき。さばかり天の下の人の、肝絶えて惑ふ君を。真実にはあらねど、うれしくこそあれ」。
〔俊蔭〕卷／六二頁

また、春宮の熱心な求愛によつて、涼にあて宮を与えるという朱雀帝の宣旨を覆し、受諾してもいる。

〔春宮〕「何か、そは。罪あらば、奏せさすばかりにこそはあなれ。な思しわづらひそ」。大将〔正頼〕、「さらば、仰せ言に従はむ」など奏し給ふを、
〔菊の宴〕卷／三〇二頁

当時外戚の地位に就くことが貴族の大願であった点を考え合わせれば、あて宮の春宮入内は一族の繁栄を望んだ正頼の政治的な判断によるものとして、選り取られたことは言うまでもない。春宮があて宮の婿に定められるのは、むしろ当然の成り行きである。〔国譲〕三巻では春宮の立坊をめぐる、源氏と藤原氏の争いを語り出す。それは一門の現実的な問題を描いたと見え、その前日譚たるあて宮求婚譚にあつては、他の作中人物にはない情報を正頼は持ち合わせていない。むしろ、読み手にとって自明の事柄が示されているに過ぎないと考える。

最後に、あて宮の場合はどうか。「藤原の君」巻劈頭から求

婚者たちに言い寄られながら、胸に秘めた想いが読み手に明かされることは決してない。

あて宮、〔仲忠の手紙を〕御覽して、人々の中に、「こともなし」と思す人なれば、かく書きつけて、賜ふ。

〔春日詣〕卷／一五〇頁

九の君と聞こゆれど、仲忠には御目とどめ給ふ。「いかで、はつかにも見む」と思へど、さるべき折もなし。馴れ馴れしき気色もなくて、まれに見ゆるは、いとめでたく清らにて、時々うち見えて、さらに馴れず。されば、いと心憎くて、をかしき者になむ思しける。

〔嵯峨の院〕卷／一七二頁

仲忠に一目置くそぶりこそあれ、慕情は明らかにされない。仮にあて宮が好意を抱くのであれば、仲忠から贈られる和歌に対して情愛に相應の返歌をすることは必ずである。だが和歌に心情を詠みこむ以前に、返歌もままならないあて宮の心中を、読み手が推し量ることは難しいと思われる。

藤壺〔あて宮〕、「今は、誰も、さこそは。ここには、さ見ゆることもなし。はかなき宮仕へをして、ゆゆしき人々の言どもを聞く時は、『あぢきなや。心ざしありし人につきてもあるべかりけるものを。さりととも、かく言はましやは』と思ふ折は多かり。またも、『心憂く、悲し』と思ふことありや」とて、泣き給ふ。

〔国讓上〕卷／六五二―六五二頁

春宮への入内を果たして、ようやく胸襟を開くあて宮。入内後の誇りに加え、春宮との不和も相俟ったことによる仲忠礼讃の

体である。求婚時には、はっきりと示されなかった恋情を読み手は初めて読み取る。

このあり方は、『竹取物語』の「かくや姫」と共通する。

なほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。夕闇には、ものを思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々は、うち嘆き、泣きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ、もの思すことあるべし」とささやけど、親をはじめて、何事とも知らず。

〔七〇頁〕

春先から月を見ては嘆息を漏らす姫君。その姿を伝え聞いた翁は理由を訊ねるが、一向に姫君は答えず、その真意を推測できない。八月一五夜近くなった折、姫は自身が月の都の住人で、天人の来迎が一五夜にあることをついに明かす。ここまで読み手は「かくや姫」の内実を知ることはない。

あて宮は人物造型の点で、『竹取物語』の「かくや姫」と重ねられてきた。両者は、読み手に限って、秘密を共有しているわけではない点に共通性が見られる。おそらく読み手は彼女たちに感情移入することが難しかっただろう。同時代に成った『源氏物語』において、

上〔紫上〕「……宇津保の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、あやまちなかめれど、すぐよかに言ひ出でたるしわざも女しきところなかめるぞ、ひとやうなめる」とのたまへば、

〔蛩〕卷／④七八頁

と、あて宮には愛想のない物言いや態度に女性らしさのないことが指摘されていた。当時の読み手も一様に見ていたはずで、読み手とあて宮の間に共通認識がないことは明白である。

このように、主人公たる仲忠が読者とだけ全篇で共有する事項に着目すると、あて宮求婚譚は『うつほ物語』の挿話の一つに過ぎないことがわかる。従来「むかし」という書き出しのある「俊蔭」・「藤原君」両巻によって、二系統の物語が混融することが言われてきた。だが一貫して機密を保持するという主人公のあり方から、『うつほ物語』は琴の伝承によって栄華を極めんとする点に物語の根幹があると見定められる。

おわりに

以上、『うつほ物語』の主人公がなぜ仲忠と言えるのか、前後の物語を参照しつつ、検討してきた。仲忠には読み手とだけ有している情報があり、他の作中人物にはそれが無い。こうした読み手と秘事を保有する存在として、作り手は主人公を定めていたと考えられる。

今回、『源氏物語』宇治十帖や、鎌倉・室町時代の作り物語については、あえて触れなかった。『うつほ物語』の仲忠の主人公性は何か、という本稿の目的から離れ過ぎてしまうと考えるためである。『落窪物語』や『うつほ物語』のように、平安期の物語は主人公を想定しやすい。対して、中世の作り物語では認定することが難しい。このことは、時代の変遷による主人公の変容として捉えられるだろう。そうした要因の一つに宇治十帖があると思われるが、今はそれ以上の回答を持ち合わせていないため、今後の課題としたい。

注

(1) 室伏信助「宇津保物語の主人公」(『王朝物語史の研究』角川書店、一九九六年、初出は一九七三年)。

(2) 物語における主人公の造型については、以下の論稿を参照。三谷栄一「物語の「主人公」」(『物語文学史論』有精堂、一九五二年)。

今井源衛「光源氏」(『今井源衛著作集2』笠間書院、二〇〇四年所収、初出は一九五六年)。

中野幸一「物語文学における「主人公」の造形―その官位の変遷について―」(早稲田大学平安朝文学研究会編『岡一男博士頌寿記念論集平安朝文学研究作家と作品』有精堂、一九七二年所収)。

(3) 大井田晴彦「物語における「主人公」の系譜―「うつほ物語」から「源氏物語」へ―」(鈴木日出男編『文学史上の「源氏物語」』至文堂、一九九八年所収)では、「俊蔭」巻から「沖つ白波」巻までの前半諸巻は正頼、「葦開上」巻から「楼の上下」巻までの後半諸巻は仲忠を主人公とする。ただし、一方で大井田晴彦「「うつほ物語」の「主人公」―光源氏と藤原仲忠・その魅力について―」(上原作和編『人物で読む源氏物語2』勉誠出版、二〇〇五年所収)では、仲忠一人を主人公と位置付けている。

(4) 本文の引用は『竹取物語』『落窪物語』『源氏物語』『狭衣物語』が新潮日本古典集成、『住吉物語』『今とりかへばや』が中世王朝物語全集、『夜の寝覚』『御津の浜松(浜松中納言物語)』が新編日本古典文学全集、『うつほ物語』が室城秀之『うつほ物語全』改訂版(おうふう、二〇〇一年)に拠る。冊数・頁数も同じ。引用した本文は、表記などを私に改めた箇所がある。

(5) 中西翔「色好み」の再検討―「落窪」道頼の変貌を通して―(『むらさき』第四七号、二〇一〇年)。「落窪物語」の場合、「色好み」という設定が有効に機能すること、物語の後半で少将が「色好み」の設定を失った理由を読みとく。

(6) 坂本信道「夜の寝覚」の予言と構想―天人予言の達成―(『語文研究』第六四号、一九八七年)。

坂本信道「音楽伝承譚の系譜―『源氏物語』明石一族から『夜の寢覚』へ―」(『文学』第五六巻第四号、一九八八年)。

(7) あて宮を「かくや姫」に比定する論稿は以下を参照。

笹淵友一「宇津保物語の解釈上の問題」(『講座・解釈と文法』明治書院、一九六〇年)。

石川徹「うつつほ物語の人間像」(『宇津保物語論集』古典文庫、一九七三年所収)。

関根賢司「かくや姫とその裔」(『物語文学論―源氏物語前後―』桜楓社、一九八四年、初出は一九七四年)。

室城秀之「うつつほ物語」におけるあて宮―「宮仕へ心行く」とは、何をか言ひけむ」(『宮中への流離』)、「うつつほ物語の表現と論理」若草書房、一九九六年)など。

(8) なお、本稿では触れえなかったが、語り手も読み手と同様に、物語を最もよく把握する存在であることを付け加えておく。高橋亨「物語の〈語り〉と〈書く〉こと」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二年)では、語り手を「モノノケ」のような存在と評している。そのほかにも、例えば秋山虔編『別冊国文学源氏物語事典』(學燈社、一九八八年)には、増田繁夫「語り手」、高橋亨「語り手」、神野藤昭夫「視点」、松井健児「心内語」で、語り手や作者が人物の心中に出入りできる存在として、さまざまに捉えられている。